



小説・人生相談

田辺聖子



講談社

妾宅・本宅 — 小説・人生相談

著 者 田辺聖子

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―一二―二
〒一一二 振替 東京 三九三〇
電話東京(〇三)九四五―一一―(大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 大製株式会社

第一刷発行 昭和五十一年四月二十日



©田辺聖子 昭和五十一年 落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

妾宅・本宅

小説・人生相談

目次

天からふんどし	5
こわいおとな	39
どことがわるい	77
六十の手習い	113
一身上の都合	165
浮気のすすめ	199
妾宅・本宅	235
あながき	270

装幀 尾崎真吾

天からふんどし

私は四十七歳の男性、職業は会社員であります。中小企業の会社の中間管理職です。

人生案内に投書するのははじめてですが、貴紙「人生案内」欄はずうっと愛読しております。

私はもう、長らく貴紙をとっています。考えてみると二十何年、煙草はピース、新聞は貴紙、と
きめているのであります。

別に主義主張からではなく、どうしてか私は一たんきめると、槍が降っても雷が落ちてても変え
ないところがあります。そういえば散髪屋も、もう十なん年のつき合いです。飲みにくくおで
ん屋、昼食のカレー屋、そば屋、ちっとも変わりません。貞操を守っている。

新しいところへいくのは、おっくうなのです。靴でも服でも、同じ型のが好きです。財布、万
年筆、腕時計、もう十なん年使っていますなあ。

財布は十年前、人に東南アジア土産としてもらった黒い鰐皮ですが、縫目がほつれたのでホッ
チキスで止めて使っております。丈夫なものは大事に使えば、いつまでも使えるものです。

体も頑健、とくべつ手入れもしませんが、病氣一つせず、人生四十年の風雪に堪えておりま
す。

いわば型も様式もじじむさく古風ながら、丈夫で壊れぬ、昔出来の機械。まあ私という男は、そんな風な所ではないかと思うものです。

そのくせ、思いがけず、大きな部分品をとりかえることになってしまいました。妻です。

私は一たん長つづきすると、いつまでも保ちますが、その代り、一たんきらいになったとなると、もういけません。バッテリーといやになるのです。こういうのは均^ならしたら、結局、続かないということかもしれません、まあそれはほとんどない。十のうち一つぐらいしか、そんなことはない。

しかるに、人生の持ち物の中で、一ばん大きな割合を占める妻が、その十のうちの一つになったのですから、私という男も、思えばヘンな人間であります。

何も財布や万年筆は長持ちしなくともよいのだ。

散髪屋のおっさんと十なん年の馴染^{なじ}みにならなくともよいのだ。妻と長持ちすればよいのに、それはダメなのです。誰がなんといつても、あの妻とは暮らす気にならん。

別居して五年になります。

尤も最初は別居するつもりはなかった。仕事の都合で姫路へ転勤になりました、妻は、子供の学校があるので、子供と共に大阪郊外の家に残りました。私は単身赴任したのであります。といつても大阪と姫路は目と鼻の先でし、土曜ごとに帰っていたのです。だんだん、おっくうになりました。しまいにひと月に一ぺんぐらい、洗濯物を持って帰るようになりました。またそのうち、全然、帰らんようになりました。それでも妻は何ともいってきませんでした。月給はこと

づけていました。

大阪本社へ戻っても、私は市内のアパートを借りて自炊しました。会社が遠くて不便、というのを理由にしました。妻ははじめ、抛^なったらかしでしたが、とうとう見にきました。

妻は同年で、背がすこし猫背の、猪首で太った女です。

「あんた、何で帰らへんの？ どういうつもり？」

と高圧的にいいます。これは妻のクセです。なぜか、（えらそうにいうオバハンやなあ）という気がしました。

一年ばかり離れているうちに、ふッと私は妻を距離をおいてみている自分に気付いたのでございます。

「何のつもりや、これは」

と妻はポータブルテレビを指して叫びました。

「テレビまで買って！」

私を買ったのはテレビだけではない。小さな食卓、台所道具一式、蒲団^{ふとん}一組、便所のスリッパから小さな鏡、もとより必要最小限の質素なもので、なければ日常に不自由を感じる程度のわずかな品物ですが、只一つのぜいたくな道具はテレビでしょう。寝ながらテレビを見る生活を一度はしてみたいとあこがれていたのです。

家にいると、妻や子供の好きな番組ばかりつき合せられるので、これも私の夢なのでありました。

妻にとってはテレビを買ったということが、世帯を別にしたことの象徴と考えるらしく、びっくりしているのです。

「あんた、ここに居るつもりなんですか、これからずうっと」

「当分は、な」

「そら気楽でええやろけど、なんで家があるのに家へ帰らへんの。二重世帯になるとお金も散るし、ややこしいし」

私はだまって煙草をふかしておりました。

「ともかく、今晚、ウチで用意してるから、一緒に帰りましょう。早く、支度しなさいよ。え！」と妻は私の上衣を壁のハンガーからおろし、畳に投げて、私を促しました。

それは、子供たちに命令するのと同じしぐさ、声音こゑでした。私を、亭主、男とみとめておらんのだ。そうして一喝すればいうことをきく、と信じこんでいるのだ。

私は横暴亭主ではございません。いたい放題いたりしません。けれども、女房に一喝されていつまでもいうことを聞くと思ったらまちがい。今まではこんなものかと思ってるからいうことをきいていたのであるが、現在只今、妻になぜこう偉そうにいわれるのか、ふしぎでならない。私はふと思いました。

身辺愛用の品が長もちするのは、品物がいいからだ。

わるい品物なら、長もちしないはずである。捨てても仕方ない。なぜかそのときの私には深遠な真理のように思われました。

「僕は帰らんよ」

そのときの妻の顔。

「帰らん、てそんなバカな」

と目玉を剝いて驚きました。そうして、私自身も、そういう自分にびっくりしたのです。

けれどそのときのことです。身上相談の手紙を書いたのではございません。私はそのまま家を出まして、ただいまも別居中です。

それにしても人生案内や身上相談に、あんがい男性からの投書は少いですね。あれはどういうことですかね。

たまには若い青年からの投書もあって、これはハンで押したように、対人赤面症なんかの相談であります。まあ、あたいてい女が多く、女は老いも若きも、人生案内を道しるべと頼っているんでしょうか。

私は朝、出勤するまでラジオを聞いていますが、これは長い時間、一人のアナウンサーがしゃべりまくっていて、時々そこへ聴取者の電話が掛ったりする仕組みです。かけてくるのがこれまた全部、女ですわ。

アナウンサーは男で、おしゃべりや折々の企画がたいへん面白く、人気番組になっています。聴取者とたえず電話でしゃべったりして、まるでそこにいてしゃべっているような身近な気持ちにならせる所がミソなのですが、電話が掛ったと思うと、まあ、ほとんど男はいません。尤も、時間帯のせいもありましょうが、

「わたし、いまお掃除の途中ですねんけどね……」

とか、

「お洗濯すんだ所ですよ」

という、つれづれなるままに電話にとりついたらしき女ばかり。

女は、しゃべる所、しゃべる相手が、よっぽどのやなあ、と思われれます。

女は井戸端会議してるやないか、といわれる方があるかもしれないませんが、女同士の話はうわべを飾っていますから、どうしても欲求不満が残るのではないでしょう。

男は、私の思うに、発散する場が多いのです。私のいくおでん屋、「赤垣屋」など見ていますと、安サラーマンや安商売人が集まって、しきりに上司をこきおろし朋輩をけなし、新参をやっつけて気焰を上げております。

あれをやるから、身上相談に投書するまでもなく、ラジオ局に電話かけて鬱^{うづ}を散ずることもないのです。

私もそうでした。

会社のことはむろん、一身上のことでも、「赤垣屋」で、一本五十円というおでんの串を並べ、熱燗の酒を飲んで、同僚の新田という男としゃべっておりますと、みんな何とか発散してしまつた。

ですから、今までは人生案内に投書することも要らなんだ。

しかし、今度は新田では間に合わぬ気がする。

つまり、新田ですと、白か黒か、どっちにしよう、というようなときの話相手にしか、ならない男なのです。彼は話を半分ぐらい聞いて、すぐ、

「ほんで、どないする、ちゅうねん」

とじれったそうに叫ぶ男であります。たとえば女房と別居しようか、どうしようか、というようなときですと、

「僕、別居しよう思うんやけどな」

と私がいいますと、ただちに、

「ほな、別居せんかい」

と、じれったそうに叫ぶのであります。こういうのをオウム返しというんでしょうか、「別居したくない」といえば、「ほな、別れたらあかん」といいそうな男です。自分の意見なんぞ、いうひまないくらい忙しいのです。

もしそれとやかく考えていたら、彼はじりじりして、

「ハッキリせえ、ハッキリ」

と怒り狂うかもしれない。ともかく人はいいが怒りっぽい男なのであります。そうして黒白をハッキリつけたがる。結論ずき。

そういうせわしない男に、ゆっくりしゃべっていられません。白か黒か、どっちかにきめる、というときは新田を相手に話していてもよいのですが、自分でもきまらない場合はどうしようもありません。

してみると、女性が投書したりラジオ局へ電話をかけたたりするのは発散場所がないというより以前に、自分で自分のいいたいことが何やわからんというも、やもやがあるのかもしれない。書いたり、しゃべったりしているうちに、自分がどうしたいかということが、だんだん、固まってくるのかもしれない。

この伝^{でん}でゆくと、私はかなり女性的であるということもできます。身上相談の先生に宛てて手紙を書いていたら、新田に相談するよりは、事態がハッキリし、自分がどうしたいかわかるかもしれぬ、という気があるのであります。

私はさっき、妻と別れるとか、家を出た、とかいう言葉を使いましたが、戸籍の上ではまだ、妻と別れておりません。

妻は、息子と娘の、就職や結婚をすませたら、籍を抜くというのです。それまでは親が離婚の、片親のというと、条件が不利になるから可哀そうだというのです。

妻は二人の子供と、今までの家に棲^すみ、私は結局のところ、べつに、郊外の文化住宅に住んでおります。私は家を出るときは一人でしたが、いまは米子^{よねこ}という女と住んでおります。米子は四十一歳で、べつの会社につとめていて、共かせぎです。

しかし彼女のために、妻子と別居したのではありません。妻と別居したのは五年前ですが、彼女と知り合ったのは三年前でございます。

妻は、私が米子と暮らすようになりましても、やっぱり籍はぬきません。そうして米子のことを、